

働きつつ学ぶ —私の経験から

基礎経済科学研究所

副理事長 高田 好章

▼基礎研自由大学院とは

基礎経済科学研究所（「基礎研」と略称します）は、1968年に京都に設立された、「働きつつ学ぶ」権利を担う研究所です。そこには、全国から大学教員や研究機関の研究者とともに、企業や自治体などに勤めながら経済学研究をする人々も一緒に、基礎研の所員・所友として活動しています。基礎研のユニークさは、前者のような専門研究者だけでなく後者のような労働者研究者が、所員・所友として同じ地平に立って、一緒に研究会を開き、互いに研究発表し議論し、論文を書いているところにあります。

近年は、一度社会に出て仕事に就いた人が再び学ぶ場として、社会人大学・社会人大学院が開かれています。基礎研はそれをすでに40年以上前から行っているのです。基礎研自由大学院（当初は「夜間通信研究科」、大学院という名称は使えなかったそうです）は、専門研究者がチューターとなり、研究生を労働者研究者に育てるだけでなく、それ以降もゼミに参加して労働者研究者として活躍することを目指しています。つまり、基礎研とこれらの社会人大学院には大きな違いがあるのです。大学院は研究者を育てる機関ではありますが、学ぶ期間が限られています。しかし、基礎研の自由大学院では

学び終わることはありません。研究生は修士論文にあたる論文を執筆して修了しますが、それ以降も基礎研所員・所友として、基礎研の自由大学院のゼミやいろいろな活動に参加し、研究活動を続けることができます。基礎研では「働きつつ学び、研究する」ことがいつまでもできるのです。そのように、私は30年近く働きつつ学び、研究してきました。

▼働きつつ学ぶとは

基礎研が掲げる「働きつつ学ぶ」とは、単なる専門教育、職業教育ではありません。「働きながら学ぶ」とは、働きながら自らの仕事を客観的に観る目を育てることです。自分の仕事を客観的に観ることができれば、それを家族との関係、地域との関係、社会との関係、経済との関係、世界との関係で捉えることができるようになります。すなわち、狭い仕事の視野から、もっと広い視野で自分の仕事の位置づけができるようになるのです。そのことが真に社会を観る目を育てることとなります。

研究方法の一つに、フィールドワークというものがあります。机の上で文献や資料を読み理論を考えるのではなく、実地に調査に行き、事実を調べる研究方法です。働きつつ学ぶ人達

は、いつもフィールドワークをしています。自分の仕事が研究対象なのです。ある研究会で私が自分の職場の簡単なレポートをしたことがあります。それをとても興味深く聴かれる大学の先生がいて、その反応が私にとって非常に意外でした。「そうか、そんなことが研究対象になるのか」と驚きました。考えてみれば、私たちは仕事をするので、生きた経済の中にいるのです。目の前に研究対象があるのです。それを単に仕事の対象だけと捉えるのか、それとも仕事の対象であると共に研究対象でもあると考えるのかは、大きな違いがあります。ただし、これには大きな落とし穴があります。職場の見聞きしたことは限られた状況の事象です。それが如何に全体と結びついているのか、特殊なことなのか、普遍的なことなのか、見極める目が必要です。ここに経済学の広い知識が必要となるのです。

ところで、自ら行う仕事から自分の経済学を創り上げるという道筋だけでなく、逆に世の中の進む方向、経済の行方を知る力量を培うことによって、自分の仕事に対しても大きな力となります。仕事をしていると、どうしても狭い視野、短絡的な思考に走りがちです。何故このような事に陥ったのか、それを解決するにはどうしたらいいのか、その時発揮できる力が、学びつつ働いたことから得られるのです。

▼大阪第三学科で学んだこと

私が会社に就職した30年前、基礎研自由大

学院のゼミのひとつである大阪第三学科に参加しました。ゼミでは、議論をしあい探究心への刺激を与えられ、目指すべき労働者研究者の先輩達の姿を追いかけて勉強してきました。時には仕事が忙しく経済学の本をゆっくり読めない時があっても、共に学ぶ人達がいるからこそ勉強を続けていくことができました。なんとしてもゼミには出るのだと。

私の1ヶ月は、基礎研のゼミを中心に回っています。月2回のゼミでは、前半は現代物、後半は古典物をテキストに取り上げています（このスタイルは夜間通信研究科以来の伝統で、今は資本論全3巻の3度目に挑戦中です）。ゼミのある第2週水曜日の前に予習をしてゼミに出席し、報告に当たっていれば週末に報告準備のレジュメ作りをし、終わった翌週の火曜日夜にはハガキ版ゼミ通信を作って発送する。そして、再び第4週水曜日のゼミに出席し、翌週はゼミ通信発送という1ヶ月のサイクルです。ゼミ通信は10年あまり前から担当になって作成していますが、ハガキ1枚の大きさにゼミ当日の報告と議論を要約する作業は、どれだけ簡潔にまとめることができるかということに対して、いい勉強になります。

これまでゼミでは指導の森岡孝二先生の編で3冊の本を出版し、25周年記念誌も発行しました。2007年刊の『格差社会の構造』は時機を得た内容であり、さらに基礎研40周年記念出版としてその続編を今みんなで書いています。経済学を勉強するということは、テキスト

を読んで皆で議論をすることだけではありません。自分の言葉で書くことを含んでいます。文献を読んで論点・批判点をまとめ、資料を集め、それらを分析しながら、読む人が納得できるような文章に仕上げる。ゼミなどで発表して批判に答えながら、また書き直す。労働者研究者はそのように、仕事をしながら、それをどこまで

深く分析できるのか、書くことによって日々鍛えられています。

働く人が自らの職業体験をもとに経済学を構築していく。基礎研自由大学院には、そのように「働きながら学び、研究する」多くの労働者研究者が活躍しています。

[本稿は紙上参加です。]

講座参加者の感想から

●非正規労働者の問題は、教育現場でも気になっている問題である。小学校の教員だが、学校現場では、「講師」という人たちだけでなく、ハローワークから雇用されている人たちが、子どもたちと向かい合っている。講義にあったように、昔はみんなが正規であったが……。雇う側が“低賃金で”ということでの今の状況になっているのではあるが、こういう現実をどう考えたらよいか、正規も講師も、ハローワークからの人も同様の仕事をしている……。賃金も働き方もどうなるのか、労働者に見合ったものなのか考えさせられてしまう。

●70年代に池上惇先生に夜間労働学校で経済学を学んだ経験があり、今日は、資本論と全面的な人間発達論の関係を大西先生の言葉を通じて改めて学ぶことができ、よかったです。非正規労働者の問題を、小さい視点でなく、大きな視点でとらえる、また、様々な角度から見ることで、時代の要請と思いました。非正規労働者

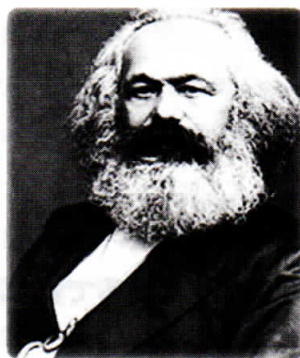
自身の身を刻んでの思考と行動を求める必要はあると思いますが、これはどのようにして成熟した形で可能になるかは、時代的に今大きなテーマだと思いました。

●私は将来地域の診療所で働きたいと思っています。日本のいたる所で過疎化が進んでいます。そのような地域において、医療者として働く場合、ただ単に医療を提供するだけでは、地域の人々を健康にすることはできません。福祉、教育、行政に関わる人達と一緒に医療を行って行かなくてはなりません。そして、経済的要因は、地域の根幹を担う全ての機関に影響を与えている。「資本論」を勉強することを通して、経済を知り、現状の日本を知り、地域の生活者として地域に役立つ人間になりたいと改めて思いました。

基礎経済科学研究所

自由大学院公開講座

時代は まるで 資本論



—今こそ求められる学びとは—

2009. 5. 10

滋賀大学大津サテライトプラザ

●基礎経済科学研究所自由大学院●

基礎研自由大学院

公開講座「時代はまるで資本論」

2009年 12月 15日 発行

発行／基礎経済科学研究所 自由大学院

編集／田中幸世

〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下る尾張町 225 第2ふや町ビル 603

TEL/FAX／(075)255-2450 <http://www.kisoken.org/>

E-mail／office@kisoken.org

●本パンフは、2009年5月10日(日)に、滋賀大学大津サテライト
プラザで開催した基礎経済科学研究所自由大学院公開講座の記
録をもとに編集したものです。●